

Spring-Summer '14

Vol.

85

(公社) 科学技術国際交流センター会報

www.jistec.or.jp

JISTEC Report

Japan International Science & Technology Exchange Center Quarterly Report

巻頭言

科学者の倫理についての再考

Article 1

「女性研究者の採用・処遇に関する国際調査」について (調査報告)

科学者の倫理についての再考

科学技術は、その進展に伴って、政府や企業の戦略にますます大きく係わってきます。最終的な判断や決定は、政治の責任者や企業のトップによるにしても、それに資する科学に基づく助言は、科学者、技術者の役割です。

為政者や経営者に対する助言は、実は容易ではありませんが、ときには厳しい助言に耳を傾けていただきたいものです。古くは「貞観政要」の教えるところです。また市民ないし住民への助言も同じです。ポピュリズムを優先して、「安全」の科学的説明を遠慮してしまう事例が見られますが、残念なことです。

福島第一原発の過酷事故の根本原因は、科学者、技術者が、科学的にあり得ない“安全神話”を事実上容認してしまったことにあります。原発の専門家はもとより、私共科学者の責任は甚大です。

これからはとくに科学者に焦点を当てて話を進めます。

大学教授の職務に、学生や若手研究者の個別指導があります。研究には作法とモラルがあり、それらの指導と、独立した科学者、技術者を目指していくについての手助けなどでしょう。

創造性豊かな、優れた大学院学生や若手研究者を教授のテーマの一分担者にしてしまうケースが散見されますが、賛成できません。論文の数は稼げるかもしれませんが、独自の世界にチャレンジできる若い時代は二度と来ないからです。一方独立を促すあまり、研究の作法や論文の書き方まで放任するのは、正しくありません。大学は、研究大学といえども教育機関です。

論文の捏造が倫理の根幹に触れるのは当然です。しかし現在の話題の疑惑論争の詳細を承知していないので、ここでは論述しません。

最近の科学技術政策の特徴は「選択と集中」の重視です。

もちろん大切なことです。しかし同時に「多様性」とのバランスが不可欠です。ノーベル賞に代表されるようなオリジナリティーの高い研究や優れたイノベーションの芽は、ほとんどすべて「多様性」の中から生まれていると言っても過言ではありません。助言者としての科学者は、「多様性」の大切さをもっと強調してほしいものです。

最近研究費の不正使用の報道が減ってきたように見えますが、本当であれば結構なことです。適正使用は、研究者のモラルと、研究機関の金銭の取り扱いのシステムの両者に大きく依存します。

研究者は今後とも襟を正すと共に、より合理的な研究費の使用に向けたシステムの整備を、政府や研究機関にお願いいたします。

最後の指摘は利益相反についてです。

研究費の配分やそれに係る政策決定に関与する科学者は少なくありません。その中で、研究費の受領側の機関や、政策決定の恩恵や影響を直接受ける機関の、要職にしている科学者がみられますが、誤解を生むもとですので、これも襟を正すべきです。

科学者（より一般的に学者）の職務は、いわゆる中央官庁の官僚のそれと異なるように、倫理も異なります。個別事項の利益相反の是非は、最終的には、科学者自らの責任で判断すべきです。

以上は「科学者の倫理」の一部に過ぎませんが、失礼を顧みず、気の付くところを述べました。しかしながら、大学や研究機関には、尊敬すべき諸先輩が多数おられるのも事実です。また、組織の人間関係を超えて、国益のために高い見識で日夜努力しておられる官僚の方々も少なくありません。したがって、上記の意見は、可能な限り一般化すべきでないことを述べておきます。



あべ・ひろゆき

昭和34年3月 東北大学工学部卒業、昭和52年10月 東北大学工学部教授、平成5年4月 東北大学工学部長・工学研究科長、平成8年11月 東北大学総長、平成14年11月 東北大学名誉教授、平成15年1月 総合科学技術会議議員（常勤）、平成19年1月 科学技術振興機構顧問（非常勤）、平成8年4月 日本機械学会会長、平成12年11月 紫綬褒章、平成13年1月 産業構造審議会委員（通産省）、同年2月 科学技術・学術審議会会長（文部科学省）、同年10月 産業競争力と知的財産を考える研究会委員委員長（経済産業省）、平成14年3月 知的財産戦略会議座長（総理大臣）、同年10月 全米工学アカデミー外国人会員、平成15年3月 知的財産戦略本部員（内閣官房）、平成24年4月 瑞宝大綬章

「女性研究者の採用・ 処遇に関する国際調査」に ついて(調査報告)

女性研究者は、日本の科学技術の重要な人材として科学技術基本計画でも、政策目標を掲げてその育成、確保を強力に推進することをうたってきた。しかしながら、日本は国際的な水準からはまだ不十分であり（第3期基本計画は25%の目標に対し13.6%の実績、第4期基本計画は30%の目標）、特に近年、日本より低位に甘んじて来た韓国が強力な政策により日本を追い抜き、調査対象国の中では日本は最下位となるに至っている（韓国14.9%に対し、日本は13.6%）。ところでこのような政策を評価し、検討していくためのデータについては、従来、国内における女性研究者問題調査に関する調査として、男女共同参画学協会連絡会、日本学術会議科学者委員会男女共同参画分科会等で調査が行われているが、海外との比較データは極めてわずかであり、かつ継続的なものとなっていない。このため、政策目標を実現する強力な政策を展開するにあたり基礎となるデータを取得するため、国際比較の調査が必要となっている。

JISTECは、従前より、日中女性科学者シンポジウム、日韓における次世代理工系研究人材交流事業、中国政府派遣研究員の受入れ事業等において、女性関係や日中韓関係の調査業務を実施してきたところから、今回主体的にこの調査にあたることとしたものである。

なお本調査の実施に当たっては、一般財団法人新技術振興渡辺記念会（武安義光理事長）より平成24年度下半期の研究助成を得たものであり、同会の協力に深く謝意を表するものである。

調査体制

男女共同参画問題、特に研究者や技術者に関する集団については多くの団体が存在しているが、これらを網羅し結集できるようそれぞれの団体のキーパーソンの参加を求め、東アジア女性研究者調査委員会（委員長野呂

知加子日本大学生産工学部教授）を設置し、国際比較の調査を実施することにした。同委員会では、本調査の目標と方針、具体的な進行管理、アンケートの作成とその分析を行ったものである。また委員会の事務局及び外部の専門家に委嘱し、中国、韓国における女性研究者の環境に関する専門的な事

項の調査を行った。

なお、本調査に併行して、第5回日中韓女性科学技術指導者フォーラムが2013年11月11日－13日に開催されることとなったことから、同フォーラムとの密接な連携を図ることとした。具体的には、同フォーラムの開催過程での中・韓の女性科学

Contents

JISTEC Report • 85



02	巻頭言 科学者の倫理についての再考 ●東北大学名誉教授／科学技術振興機構顧問 阿部 博之	08	報告 第3回総会および第5回理事会
03	「女性研究者の採用・処遇に関する 国際調査」について（調査報告）	09	外国人研究者用宿舎／ 二の宮ハウス・竹園ハウス
06	JISTEC NEWS ▶国内フォーラム・国際シンポジウム の開催について（報告）	11	外国人研究者からのMessage 日本での忘れ難い経験
07	▶刊行物のご案内		
08	▶第21回 Winter Institute		

技術者にアンケートへの参加を求めるとともに、日中韓女性科学技術指導者フォーラム第3日目のサテライト会議（11月13日つくば市NIMSで開催）において成果を公開するとともにパネルディスカッションを行ったところである。

また専門的な事項の調査に当たり、JST研究開発戦略センターフェロー岡山純子氏に協力をいただいた。

アンケート調査結果

【女性研究者比率】

- 中国は女性研究者比率が高め、かつ充分と思う人が6割であった。
- 韓国と日本は比率が低め、かつ不充分と思う人が8割以上であった。（参考：実績は、日本が14%、中国が30%、韓国が15%であった。）

【女性研究者支援施策とその効果】

- 「方針・施策」、「数値目標」、「積極的改善策」については、半数が効果を認めた。
- 「環境整備」の有効性について、中国は効果を認め、韓国ではあ

まり効果がないとされた。

- 「リーダー育成プログラム」は効果的という声が高く、特に中国では8割程度有効と回答があった。
- 総じて、女性研究者支援のための国の施策の認識として、日本と韓国は似た回答パターン、中国は若干異なる傾向であった。

【女性研究者増加による社会的利益】

- 国としても機関としても、半数が良い効果があると認識している。
- 「長期的な研究開発への効果」、「経済効果」、「長期的な人材養成への効果」について、確かに効果があるという回答が半数以上、いくらか効果があるという回答と合わせると7～9割であった。

【女性研究者増加のための改善策】及び【女性研究者リーダー育成のための方策】について具体的な有効策が回答された。

留意すべき背景と社会環境

(1)韓国

韓国では、日本以上に厳しい「男

女有別」等の風潮があるものの、女性団体の政治力や少子高齢化の進展、人材の確保の必要性等を背景に、近年急速に積極的な女性政策を展開するようになった。

とりわけ、少資源国である韓国においては、科学技術と人材が国の重要な資源と認識されており、女性の科学技術人材の育成・登用に積極的に取り組もうとする姿勢が見られる。2001年に制定された科学技術基本法（2001年制定・施行）にもこの方針は反映されており、「政府は女性科学技術者の養成及び活用に必要な施策を講じ、かつ推進しなければならない」としている。翌2002年には女性科学技術人材育成及び支援に関する法律が制定され、これに基づき積極的措置等が実施された。なお、韓国では政府系研究機関は女性採用実績が機関評価にも反映されるため、日本よりも政策の効果が得られやすいという事情がある。

OECD諸国における女性研究者比率をみると、2000年代前半は日本と下位争いをしてきた韓国が徐々にその比率を伸ばし、日本が取り残されている様に見受けられるが、この背景にはこうした韓国政府の女性科学技術者養成に係る積極的な取り組みがあると考えられる。

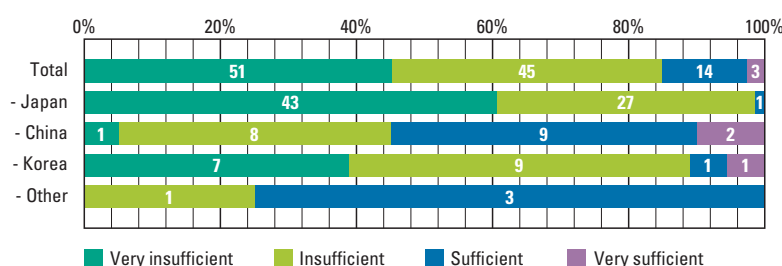
(2)中国

中国は1949年の建国以来、女性の社会進出が進み「同工同酬」の原則（女性が男性と平等に仕事をし、同じ給料を得ること）のもと女性も男性も平等な社会的役割と責任を担ってきたという日韓とは異なる経緯がある。さらに、中国では子育ては「家族でするもの」とされ、夫はもちろん、双方の両親、親族のサポートがある。このため、中国の女性は、結婚・出産後も仕事を続けるのが普通であり、労働時間も男性とあまり変わらなかった。

ただし、実際には1980年代に市場経済化が進むにつれ経済格差が広が

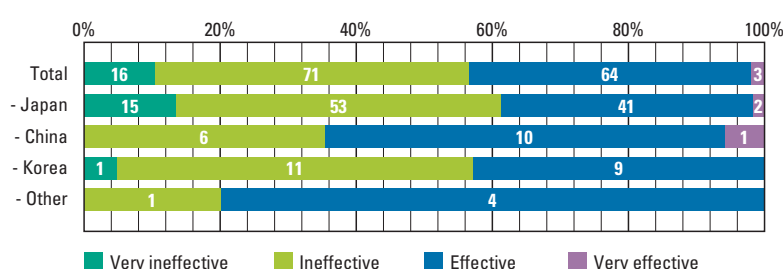
説問「自国における女性研究者比率を十分と考えるか」の回答結果

Q1-2. Do you think the proportion of female researchers in your home country is sufficient?

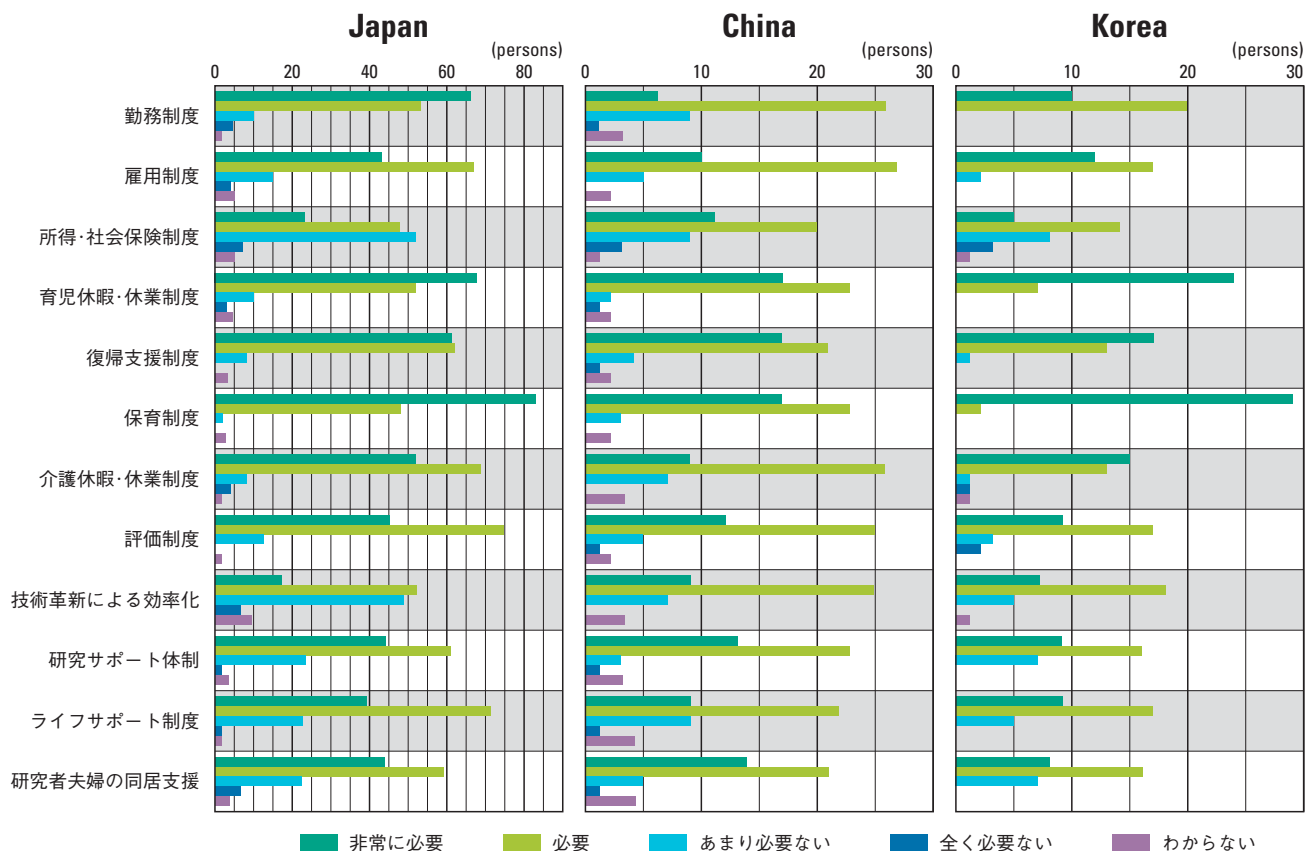


説問「自国における女性研究者増加のための方針や施策の効果の有無」についての回答

Q4-2. Do you think these policies and measures are effective in increasing the number of female researchers?



説問「より多くの女性研究者が研究継続し、活躍するための環境整備という観点から、次の項目の整備と改善の必要性についてどう思うか」に関する国別回答



り、高い経済力を身につける女性が現れる一方、競争激化のもとで女性が不利な状況におかれる現象も現れ始めている。

さらに、定年については男女で明確な差がある。法定退職年齢は、男性が60歳であるのに対し、女性が50歳（女性幹部は55歳）となっている。これについては、定年が早ければ年金を早く受給できるので「女性優遇」とブルーカラー層の多くが肯定的に捉える一方、生涯賃金が減り、中年時の昇進に不利に働くことから、ホワイトカラー層を中心に「女性差別」として、裁判になった例まである。

中国科学技術統計年鑑（2011年版）によると、中国における研究開発人材354万人のうち、およそ25%に相当する89万人が女性である。中国トップの研究機関である中国科学院における女性研究開発人材比率は更に高く、7.6万人中2.6万人とおおよそ34%が

女性である。中国の女性科学技術人材が日本や韓国よりもはるかに多い比率で社会に進出している様子が見えがえる。

まとめ

本調査を実施するに当たり、次のような点が明らかになった。

- ①アンケートの回答数は多いとはいえなかったが、日中韓の研究者から同一の質問に回答が寄せられ、同じ基準での分析を行うことが可能となったことは画期的であったと考えられる。今後は、既に行われている国内調査と比較しながら分析をすることにより、より深い政策分析を行うことが期待される。
- ②特に、女性研究者の採用・処遇に関し、女性だけではなく男性も含め、また自国居留者だけで

なく日本滞在者も含め、また現状把握だけでなく政策に関する意見をうかがえたことは、複合的な分析を踏まえた政策の検討に資することとなると考える。

- ③アンケート結果では、女性研究者比率やその比率に対する満足度のような国ごとに顕著に差が示されたものと、女性研究者の支援のための具体的な改善策のように3国を通じて共通した回答が得られたものに分かれており、今後、こうした国ごとの政策の調査分析が深められる事がのぞまれる。
- ④また、本調査は、将来の国際定点調査の実施の可能性を検討する目的も持っており、本調査で得られたノウハウや手法は分野を変えた調査にも役立って行くと考えている。

1 「原子力が有する社会的リスクと科学的リスクーリスク概念を導入した原子力発電の安全性向上を目指してー」国内フォーラム・国際シンポジウムの開催について(報告)

JISTECでは(一財)新技術振興渡辺記念会の受託事業として、平成25年度より「国内オピニオンリーダーとの対話等を踏まえた原子力発電所の過酷事故の防止対策に関する調査研究」を実施しています。本事業は我が国のオピニオンリーダーを対象に、フォーラムの開催等による国内外の専門家との双方向の議論を行い、主に技術的な側面からまとめられた提言「原子力発電所が二度と過酷事故を起こさないために」(技術同友会のホームページよりご参照いただけます)の内容を実践していくための課題について調査、分析を行い、国や原子力事業者等へ提言す

ることを目的としたものです。

阿部博之東北大学名誉教授呼びかけの下、原子力発電所過酷事故防止検討委員会が組織され、2013年11月15日(金)、科学技術館(東京都千代田区)において、国内フォーラム「原子力が有する社会的リスクと科学的リスクーリスク概念を導入した原子力発電の安全性向上を目指してー」を開催し、産学官関係者からジャーナリストまでおよそ80名が参加し、活発な議論が交わされました。



左から 原子力発電所過酷事故防止検討会より 阿部名誉教授(開会挨拶)、宮野客員教授(報告)。貴重講演より入倉講師、内田講師。パネルディスカッションモデレーター：鳥井氏



パネリスト：左より来馬氏、木村氏、村上氏、杉山氏(過酷事故検討委員会委員)。原子力発電所過酷事故防止検討会より石田氏(閉会挨拶)

【国内フォーラム プログラム】

13:00	開会挨拶 — 原子力発電所過酷事故防止検討会呼びかけ人 東北大学 名誉教授 阿部 博之
13:10 ~ 14:00	報告「原子力発電所過酷事故防止検討会報告書」 — 原子力発電所過酷事故防止検討会 主査/法政大学大学院デザイン工学研究科 客員教授 宮野 廣
14:00 ~ 15:00	基調講演 “原子力発電におけるリスク要因” (1)「地震動と断層問題」 — 京都大学 名誉教授 入倉 孝次郎 (2)「汚染水の取扱い」 — 財団法人 エネルギー総合工学研究所 特任研究員 内田 俊介
	～ 休 憩 ～
15:20 ~ 16:50	パネルディスカッション ・モデレーター：NPO法人テクノ未来塾 理事長 鳥井 弘之 ・パネリスト：日本エネルギー経済研究所 研究主幹 村上 朋子 NPO法人パブリックアウトリーチ研究総括/東京大学 非常勤講師 木村 浩 福井工業大学 教授/元福井県原子力安全対策課長 来馬 克美 原子力発電所過酷事故防止検討会 委員/北海道大学 名誉教授 杉山 憲一郎
16:50	閉会挨拶 — 技術同友会 代表幹事/原子力発電所過酷事故防止検討会メンバー 石田 寛人



2014年4月17日(木)にはTEPIAホール(東京都港区)において、国際シンポジウム「原子力が有する社会的リスクと科学的リスクー自然の脅威：地震・津波に立ち向かう最善の方策を求め」を開催しました。国際シンポジウムは対話型シンポジウ

ムとして進行することを試み、パネリストだけでなく、参加者全員が双方向でコミュニケーションを取ることができるよう、会場内をグループテーブルで構成し、およそ100名の参加者がそれぞれのテーマについて賑やかに意見交換を行いました。



左から 阿部名誉教授(開会挨拶)、Malcolm Grimston氏(招待講演)、亀田氏(招待講演)、山口氏(招待講演)、宮野客員教授(基調講演)



パネルディスカッションにおいて、左よりモデレーターの近藤氏、登壇者の高田氏、村松氏、谷氏、Steve Woody Epstein氏、下段左よりJ.E. Yang氏、石田氏（閉会挨拶）

会場風景

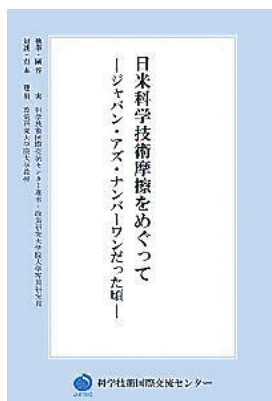
【国際シンポジウム プログラム】

13:00	開会挨拶 — 東北大学 名誉教授 阿部 博之（原子力発電所過酷事故防止検討会 呼びかけ人）
13:10 ～ 13:40	招待講演（1）「英国におけるリスク認識とリスク理解への取り組み」 英国国立国際問題研究所 研究員 Malcolm Grimston
13:40 ～ 14:10	招待講演（2）「日本における自然の脅威と対策」 京都大学 名誉教授 亀田 弘行
14:10 ～ 14:40	招待講演（3）「原子力の安全とは」 大阪大学 教授 山口 彰
14:40 ～ 15:10	基調講演「過酷事故に備えるには —リスクを考える—」 原子力発電所過酷事故防止検討会 主査／法政大学大学院デザイン工学研究科 客員教授 宮野 廣
15:10 ～ 15:30	～ 休 憩 ～
15:30 ～ 17:30	パネルディスカッション「原子力が有する社会的リスクと科学的リスク」 ・モデレーター：アクセンチュア 近藤 寛子 ・パネリスト：東京大学 教授 高田 毅士 大阪大学 教授 山口 彰 東京都市大学 工学部 原子力安全工学科 特任教授 村松 健（原子力発電所過酷事故防止検討会 支援専門家） 防災科学技術研究所 兵庫耐震工学研究センター 契約研究員 谷 和夫（原子力発電所過酷事故防止検討会 委員会） 日本原子力学会／標準委員会 Steve Woody Epstein（ノルウェー） KAERI 総合安全評価部長 J.E. Yang（韓国）
17:30 ～ 17:40	閉会挨拶 — 技術同友会 代表幹事 石田 寛人（原子力発電所過酷事故防止検討会 委員会）

2 刊行物のご案内「日米科学技術をめぐって —ジャパン・アズ・ナンバーワンだった頃—」

JISTECでは平成24年度上期（一財）新技術振興渡辺記念会助成事業において「科学技術政策から国際科学技術交流政策への展開調査」を実施し、この調査を単行本として刊行しました。

ご興味がおありの方は、ご遠慮なくJISTEC本部までお問い合わせください。



（定価：¥1,000（税抜））

目 次

はじめに
第一章 協定交渉前夜
第一節 協定交渉以前の経済摩擦と科学技術摩擦
第二節 先端技術と国際環境日米会議
第二章 日米科学技術協力協定交渉
第一節 交渉開始
第二節 交渉内容
第三節 協定締結
第三章 国際問題懇談会
第一節 国際懇が動き出すまで
第二節 国際問題懇談会における検討の材料
第三節 国際懇報告書とそのポイント
第四章 協定への対応
第一節 緊急的予算措置
第二節 外国人研究者受け入れの実施体制
第五章 その後の国際研究交流の状況
第一節 国際研究交流における受入／派遣
第二節 外国人研究者受入のための科学技術政策
第三節 外国人研究者をめぐる環境の改善
第六章 協定交渉をめぐる評価
第七章 日米科学技術協力協定交渉に現れた戦略

3 第21回 Winter Institute

第21回Winter Instituteが1月17日（金）から2月22日（土）の日程で行われました。今年は、10名の参加となりました。参加された10名の皆さんは韓国での1次選考、日本での最終選考により選抜された大変に優秀で意欲に満ちた方ばかりで、昨年10月24日（木）にソウルにおいて開催された参加者への説明会から日本語の研修や研究など、来日に向けた準備を重ねて来ました。

成田空港に降り立った皆さんはひと月あまりの日本での生活への期待に胸を膨らませていました。オリエンテーションなどをこなした後、それぞれの受入機関での研究活動に入りました。

例年通り、日本の文化を学ぶツアーがありました。今回は

いつもとは違ったツアーとなりました。ご存知のとおり、今年の冬は例年になく大雪に見舞われた関東地方でしたが、ツアー実施の2月8日は、その大雪が最初に襲来したまさにその日でした。予定していたスカイツリーも営業中止となりましたが、吹雪の中、人力車での浅草めぐりは強行されました。付き添いのセンター職員が、待合室で暖をとっていると、戻ってきた皆さんは口々に「とっても楽しかった!」。ツアーの終了時間になっても収まらない吹雪に、急遽宿舎までバスによる帰宅となりましたが、外の天気もなんのその、ゲームで盛り上がりすぎてしまう皆さんでした。さすがは厳しい選考を経て選抜された皆さん、頭脳、体力、気力の三拍子が見事にそろっているのです。



開講式



日本文化体験にてー着物の着装体験



吹雪の中の浅草ツアー



研究報告発表会にて

報告

公益社団法人 科学技術国際交流センター(JISTEC) 第3回総会および第5回理事会

平成26年5月26日（月）、学士会館において、第3回総会と第5回理事会が開催されました。平成25年度の事業報告と平成26年度事業計画の変更が了承され、また、役員の選任及び互選が行われ、会長に柘植 綾夫、理事長に間宮 馨、専務理事に岩崎 健一が引き続き就任することとなりました。

総会終了後の懇親会には会員のみならず、在京科学技術アタッシュはじめ多くのご関係者にご参加いただき、尾身 幸次STSフォーラム理事長、山東 昭子参議院議員、土屋 定之文部科学審議官、田中 眞紀子顧問よりご挨拶を賜りました。



尾身 幸次
STSフォーラム理事長



山東 昭子
参議院議員



土屋 定之
文部科学審議官



田中 眞紀子顧問



懇親会の様子

外国人研究者用宿舎 | 二の宮ハウス・竹園ハウス

■居住者からの発信

Xue-Kun Pei 裴雪昆

●中国出身。産業技術総合研究所（AIST）研究員の夫とともに、2013年3月より滞在。

二の宮ハウスに入居したきっかけは主人の転勤でした。

二の宮ハウスに入居する前に一回引っ越し経験がありました。家中の物を整理したり、粗大ごみの処分をしたり、いろいろなところへ電話をしたり等、引っ越しの手続きと準備は大変面倒なものでした。引っ越し後も生活にも慣れず、荷物の片付けに手間取ったり、生活必需品を揃えるのに時間がかかったりと大変でした。

そこで、今回の引っ越しはこのような苦勞をしないようにお部屋を探すことにしました。丈夫で遮音性が高く、夏は涼しく冬は温かい鉄筋コンクリートの部屋に住みたいと思っていました。そして、主人の職場に近くて、買い物にも便利なところが一番いいと思っていたところ、二の宮ハウスが目にとまりました。家具・家電・寝具・キッチン用品付きということで、家族全員が気に入って、躊躇することなくすぐ申し込みをしました。

2013年3月29日に、旅行に行くような気分で引っ越しの目的地へ出発し、その日の午後つくば市に到着しました。二の宮ハウスに向かったところ、目の前に立派な建物が現れました。関係者以外は入れないように、入口のドアは専用センサーが働いて開閉します。事務室の職員さんに部屋まで案内され、部屋利用のルール、館内施設などを詳しく説明してくれました。この建物は耐震強度が高いと聞いた時、安全で安心して住めるところだと思いました。そして、スタッフ全員が英語を話せるということに一番驚かされました。私が日本語に慣れてきてからは、わからないことを聞くと、スタッフがとても親切に日本語で答えてくれました。

その4月からうちの娘は二の宮幼稚園に通い始めました。最初のうちは、娘の言葉は大丈夫かどうか、友達とうまくやっていけるかなどすごく心配しましたが、幼稚園の先生たちはとても元気でいつも明るい笑顔で話しかけてくれて、心から温かみを感じました。とくに担任の香先生は娘の幼稚園での様子をよく話してくれて、安心することができました。短い間に娘は仲良しの友だちもでき、うちに招待しました。実は幼稚園のお友だちの親ごさんたちも二の宮ハウスのことをよく知っているようでした。あの立派な建物の中を覗いてみたいという話をよく耳にしたり、うちに遊びに来る親ごさんたちは部屋からの景色がすごくいいと話しているのを聞いて



筆者のお嬢さん

たりすると、私も嬉しい気持ちになりました。

正直初めの頃は誰も知

らないところへ来るのは寂しいと思っていましたが、幼稚園のPTA会長の松田さんは二の宮ハウスでイベントをよく開いていて、私も誘われました。私も一度、先生になり、二の宮ハウスの集会室で中国の水餃子の作り方を教えたことがありました。これらのイベントのおかげで、多くの親ごさんと親しくなりました。娘はこの幼稚園に通って本当に良かったと思っています。

二の宮ハウスでの生活も充実していました。バスツアー、夏祭り、料理教室や日本伝統文化教室等のイベントがたくさん行われました。

私は料理にとっても興味を持っているので、いなり寿司教室に参加しました。一番印象に残っていることは煮た油揚げの中に鰯飯を詰めた時の出来事でした。鰯飯はねばねばなので手に水をつけながら作業を進めていきました。ある欧米人男性は手に鰯飯を握ったり水をつけたり作業しましたが、結局水の中に鰯飯がいっぱい残ってしまいました。その男性も不思議な顔でみんなを見ながら一緒に笑いましたが、たぶん家で料理をやったことがないのだと思いました。もちろん一番の楽しみだったのはいなり寿司を食べることです。みんなでテーブルを囲んでいただきました。私はダイエット中にもかかわらず、4個も食べてしまいました。娘もスタッフが作ったおむすびをたくさん食べました。いつのまにか2時間が経ち、楽しい雰囲気の中でイベントが終わりました。



いただきます！

書道教室にも娘を連れて参加しました。その時、娘はあと半年で小学生になる頃でしたから、うちでひらがなとかカタカナの書き方を練習していました。この書道教室はめったにないチャンスだから絶対に逃してはいけないと思い、すぐ申し込みました。その日集会室に入ってみると、漢字自体を書くことのできない外国人の人たちも書道に興味を持っていることを知りとても驚きました。娘は最初

恥ずかしくて私の隣にそのまま座り込んでしまいましたが、書道の先生やスタッフと話すうちにリラックスしたようで、書道の練習に夢中になり、結局数枚書いていました。最後にイベント中に習った漢字を使ってはがきを作り、みんなで自分の作品を自慢し合いました。娘も子どもらしいものを作り、可愛い作品ができあがりました。

これらのイベントのおかげで、たくさんの人と知り合うことができたが、もう一つ嬉しかったことはクリスマス前にクリスマスツリーに飾るオーナメント作りのイベントで、



年賀状に挑戦



オーナメントの前で

韓国人のお子さんと知り合ったことでした。今年四月に娘と同じ登校班になり、大変助かりました。今は竹園ハウスに引っ越しましたが、今でも会うとお互いに必ず挨拶します。

毎回イベントではスタッフの方たちが準備し夜遅くまで片付けをして、たくさんの素晴らしいイベントを開催していただいて、心から感謝しています。本当にありがとうございました。竹園ハウスに引っ越してから、よく二の宮ハウスに伺っています。これからも引き続きよろしく願いいたします。

■おもてなしの心を体験

2020年東京五輪招致活動のプレゼンテーションのスピーチで使われたことで注目を浴び、昨年末の流行語大賞になった言葉「おもてなし」。日本人のホスピタリティ精神を表す言葉とされています。また時を同じくして伝統的な食文化としての和食が無形文化遺産に登録されたこともあり、「茶道と和食」の二つの教室を開催し、居住者に体験してもらいました。ちなみに、「茶道教室」と「和食（日本の家庭料理）教室」はイベントアンケートの回答で体験してみたい日本文化として毎回あげられものです。

まず、日本人にとってもそう身近ではない「茶の湯」の世界へ。一定のお作法でお茶を点て、お作法に従って飲むというだけでなく「利休七則」「和敬清寂」「一期一会」といった茶会の席で人をおもてなしする際の心構えと、いかにしてその場、その時間、そこに会する人たちを最高の舞台として演出するかなど、茶道の精神を先生から教えていただきました。茶道には、「主客一体」という考え方があり、ホスト（主）とゲスト（客）が一体となってその「空間と時間」を作りあげ、おもてなしの場を共有するものであることも学びました。

次の「和食（日本の家庭料理）教室」では、

日本のお母さんの味を母国に戻ってから友達や家族に披露する機会があった時に比較的簡単に手に入る食材でできるようにと、メニューを「稲荷寿し・きんぴら・お吸い物」の3品としました。参加者は日本の食材や調味料への関心が高く、昆布での出汁の取り方などに多くの質問がありました。先生からは手軽に購入できる即席出汁からでも十分美味しくでき、便利なので、自分で作るときは本格的な出汁にこだわらず即席出汁を使うようアドバイスされました。

和気あいあいとした雰囲気の中、思いのほか器用に油揚げに寿し飯をつめる参加者、手のひらにご飯粒をたくさんつけながらつめる参加者もあり、最後に好きな具材をトッピング、稲荷寿しを完成させていきました。



料理に取り組む参加者たち



完成！！



ガヤトリ・アケティ Gayathri Aketi

●インド出身。
物質・材料研究機構（NIMS）研究員の夫とともに、2014年4月より滞在。 Republic of India

日本での忘れ難い経験

はじめまして、インドのバンガロールから来たガヤトリ・アケティです。夫のラム・パスパティ・スガネシュワルがポスドクとして物質・材料研究機構（NIMS）で仕事をすることになり、一緒に来日しました。夫にとって日本の滞在は2度目となるので、私は日本での暮らしや文化、行ったところなどについて夫からいろいろと聞いており、来日が楽しみで仕方ありませんでした。今年の4月10日に日本に着き、二の宮ハウスが滞在先となりました。その週末、夫は私につくばの街を案内してくれました。

夫は毎日職場を出る時に、私に帰宅時間を知らせる電話をしてくれます。日本に来て一週間が経った4月18日も、いつものように午後7時半頃まもなく仕事を終えるという連絡がありました。夕食の準備をしながら夫の帰りを待っていると、近くで救急車のサイレンが聞こえました。帰りが遅い夫のことを考えると不安でたまりませんでした。誰かに聞きたくてもこの国ではまだ誰の電話番号も知らないのです、どう連絡したらいいか分かりません。そして嫌な予感的中し、それは現実となりました。二の宮ハウスのスタッフから電話があり、夫が交通事故に遭い病院にいること、別のスタッフが私を病院に連れていくために来てくれることを伝えてくれました。タクシーが到着し、私たちは筑波メディカルセンター病院へ行きました。

病院で夫と面会して間もなく、夫の受け入れ研究者である長尾忠昭さんとJISTECの浜小路アンナさんが駆けつけてくれました。日本語が分からない私のために、夫の骨折の状況を通訳したり、手術の日程を決めたり、保険会社や事故の当事者にも会い、どのように事故が起こったかについても詳細を説明してくれました。

夫の受け入れ研究者の長尾さんには本当にお世話になりました。職場で必要な書類や事務的な手続きをしてくれただけでなく、今後どのようなことに気を付けたいのかという具体的なことまで、親身になって教えてくれました。夫が入院している間も、時間の許す限りお見舞いに来



執筆者のガヤトリさん

て、夫を励ましてくれました。事故で夫のノートパソコンが壊れてしまいとても困っていたのですが、新しいものまで用意して下さったのは、本当にありがたいことでした。

JISTECの浜小路アンナさんも、毎朝出勤途中に病院に立ち寄り、朝から面会に来て私の様子を気にかけてくれました。来日後間もなかったのどこで何を買いだめするのか分からない私のために、携帯電話や夫の服などの買い物、ATMの使い方、そして当分の間足が不自由となる夫が退院後必要となる備品についてもこと細かく教えてくれました。また、アンナさんが語ってくれる様々な経験談は、私を日ごとに勇気づけてくれました。

一方、私たちのもう一つの問題は、来日後1週間で事故に遭ってしまったため、手持ちのお金がそれほどないということでした。すると、長尾さんとアン



▲歩行器を使って歩くラムさん

ナさんが保険会社の人に事情を説明してくれ、当面必要となるお金を受け取れるよう交渉してくれました。これは本当に助かりました。アンナさんは病院でも警察でも保険会社でも、どこに行っても私たちを全面的にサポートしてくれました。

夫が病院に入院している間、思いがけず良いこともありました。夫と結婚したのは今年の6月ですが、私たちは双方の親が決めたお見合い結婚で、結婚後も夫の仕事が忙しかったため、これほど長い時間一緒に過ごしたことがありませんでした。入院したばかりの頃は心細く泣きたい気持ちでいっぱいでしたが、少し落ち着いてくると二人で過ごす時間は貴重で、以前よりも夫との絆を強めることができました。また、入院中テレビで見ていた相撲にも興味を持ちました。最初はルールもまったくわからなかったのですが、アンナさんに教えてもらい、最後は誰が優勝するのか興味津々になりました。是非日本にいる間に国技館に行って生で相撲観戦をしてみたいと思っています。

夫が入院していた筑波メディカルセンターは本当に良い病院で、手術をしてくれた兵頭先生やその他の先生には感謝の気持ちでいっぱいです。言語の壁というものもありましたが、病院のスタッフの方たちはとても親切で、私達とうまくコミュニケーションが取れるよう、いろいろとベストを尽くしてくれました。リハビリ担当の遠藤さんも、歩行練習をする夫を毎日励ましてくれました。

長尾さん、アンナさんを始め、兵頭先生やその他の先生方、遠藤さんと全ての病院のスタッフの方々に深く感謝を申し上げたいと思います。皆さまのおかげで夫は順調に回復をしています。



▲仲の良いご夫婦

最後に、今回の事故を体験した者として、車を運転する全ての人達へ私からのメッセージを伝えたいと思います。

夫は不運にも事故に遭ってしまいましたが、運転者が自動車保険に入っていたおかげで、私たちは保険金を受け取ることができました。もしそれが無かったら、途方に暮れていたはずですよ。今頃、もっと酷い状況で苦しんでいたことでしょう。誰もが思いもかけない事態に遭遇する可能性があります。その時に保険がどれだけ助けになることか。皆さん、どうぞ自動車保険に加入してください！



編集後記

ゴールデンウィークも終わり、もう6月。また、あの梅雨の到来を予感する。夜、TVのチャンネルをひねると必ず明日の天気予報を見てしまう。十代の頃は雨が降ろうが、傘もささずに平気で自転車に乗ったもんだ。中高年になると心身の好不調は天気の影響を受けやすくなるということか？ 近年、大きな自然災害がもたらす被害に驚くことも多い。今年の後半は穏やかな日々が続いて欲しいものだ…。 (K.A)



(公社)科学技術国際交流センター会報

Spring-Summer '14
平成26年6月16日発行

発行責任者

公益社団法人 科学技術国際交流センター
〒112-0001 東京都文京区白山5-1-3 東京富山会館ビル5F
TEL. 03-3818-0730 (代) FAX. 03-3818-0750

●本誌に関するお問い合わせは、当センターまでお願いします。
なお、本誌に掲載した論文等で、意見にあたる部分は、筆者の個人的意見であることをお断りします。